

INFORMATION

インフォメーション

■2018(平成30)年度 9月～12月の行事予定

9月

休館日
工事のため
1～14まで
18・25

巡回展

長野県の遺跡発掘 2018

- 塩尻市立平出博物館
8/11(土)～9/17(月)
- 浅間縄文ミュージアム
9/29(土)～11/25(日)

講座・イベント

古文書講座			
初級 A	第4回	9/16(日)	
B	第3回	9/20(木)	
中級 A	第4回	9/15(土)	
B	第3回	9/20(木)	
上級	第4回	9/29(土)	

秋季企画展

最古の信州ブランド黒曜石 —先史社会の石材獲得と流通—

9/15(土)～11/25(日)

- 講演会
9/22(土) 13:30～15:00
講師 浅間縄文ミュージアム館長
堤 隆氏

- 演題「黒曜石が語る列島の細石器文化」
- イベント
10/20(土)
○10:00～12:00
・ワークショップ
「英国フリントの石器作り」
○13:00～14:15
・企画展コーナー開設
○14:30～16:00
国際交流子どもサミット
「歴史遺産の未来を考える」

- 国際シンポジウム
10/21(日) 13:00～15:30

- 講師 ピーター・トッピング博士
(イングリッシュヘリテイジ)
- 演題 「先史時代における採掘
活動の社会的背景」

- ・シンポジウム
「地球資源の開発とその社会」

- コンサート・トークショー
11/3(土) 13:00～(予定)

- テーマ「黒曜石の世界」

- シガーソングライター 葦木ヒロカ氏ほか

- ギャラリートーク
9/29(土)・10/27(土)・
11/23(金)

遺跡探訪会
10/6(土) 8:00～16:30

古文書講座			
初級 A	第5回	10/7(日)	
B	第4回	10/18(木)	
中級 A	第5回	10/6(土)	
B	第4回	10/18(木)	
上級	第5回	10/13(土)	

古文書講座			
初級 B	第5回	11/15(木)	
中級 B	第5回	11/15(木)	

森將軍塚まつり
11/3(土)

県立歴史館の信州学出前講座
信州学出前講座 in箕輪
11/24(土)

近世史セミナー
12/9(日)

県立歴史館の信州学講座
第5回 12/1(土)
「信州の風景とイギリス風景画」
第6回 12/22(土)
「近世後期の武士家臣団」

10月

休館日
1・9
15・22
29

11月

休館日
5・12
19・26

12月

休館日
3・10
17・25
12/28
～1/3

冬季企画展

自然を見つめた 田淵行男

12/15(土)～2/17(日)

表紙の写真の解説

国史跡星箕峠黒曜石原産地遺跡の黒曜石原石

長和町教育委員会

今から87万年前、和田峠周辺でできた黒曜石が火砕流となって星箕峠まで押し出されたと考えられている。白色の火砕流の中に含まれる大小の角礫状の黒曜石、縄文人はこれらを求めて地下を掘り、縄文鉱山となった。

行事アルバム

*** 歴史館でこどもの日 ***



5月5日、天気にも恵まれ、515名の皆様にご参加いただきました。石のアクセサリーづくりやプラ板マスコットづくり、縄文人になって遊ぼうなどのブースから聞こえてくるお子さん・ご家族の楽しそうな声が歴史館がいっぱいになりました。

*** 信州学講座 ***



5月26日、笹本館長の「歴史館から信州学を考える」を封切りに、「県立歴史館の信州学講座」がはじまりました。「信州学」の主な目的は足元の歴史をしっかりと学ぶことで自らを客観的に見つめ直し、その知識を未来を創造する原動力にすることにあります。毎回盛りだくさんの内容で3月まで全9回の講座です。是非ご参加下さい。

*** 古文書講座 ***



古文書講座が始まりました。初級講座では7割の人が古文書を初めて読むという方がたです。辞書のひき方から始まり、どんなふうに文字を崩してあるのか、江戸時代の人名の読み方など受講者の皆さんはとて熱心に学んでいます。定年退職後に思い立って古文書を読み始めた方や20代の女性など幅広い年齢層の方が学んでいます。

長野県立歴史館たより 秋号 vol.96

2018(平成30)年8月17日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail : rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ : http://www.npmh.net/

印刷 奥山印刷工業株式会社

長野県立歴史館たより

2018年 秋号 vol.96

平成30年度 秋季企画展

最古の信州ブランド黒曜石

—先史社会の石材獲得と流通—



平成30年度秋季企画展 **2018.9.15(土)~2018.11.25(日)**
最古の信州ブランド黒曜石
 ~先史社会の石材獲得と流通~

黒曜石 黒く耀く石の魅力

黒曜石は、割れ口が鋭く加工しやすいため、矢じり（石鏃）やナイフをはじめとする多彩な石器づくりの材料として当時の人々に好まれ、広く利用されてきました。

火山の多い日本列島は世界でも有数の黒曜石原産地帯で、国内には100か所以上の産出地があります。長野県の霧ヶ峰から八ヶ岳にかけての「信州黒曜石原産地」は、本州最大規模を誇り、日本を代表する黒曜石原産地のひとつです。

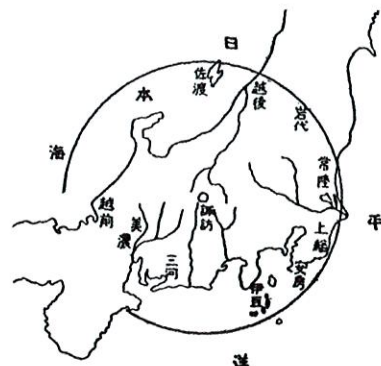
「信州黒曜石原産地」には30か所におよぶ産出地が確認されています。その産出状況は多様で、火道岩脈、溶岩流、火砕流堆積物の噴出に伴う一次的な産状のほか、産出地からの一次的な崩落などにより、山腹や河岸段丘・河床に見られる二次的な産状などがあります。また「ズリ」と呼ばれる小型の黒曜石原石が散布するもしくは集積するような産状もあり、ここには、あとで述べる採掘跡があったようです。

一口に黒曜石といっても成因や産状によって様々な顔つきをしています。日本国内各地の黒曜石を比較できるように展示いたします。

黒曜石研究の聖地

長野県の黒曜石研究史は長く、明治時代に発見された諏訪湖底の曾根遺跡から引き揚げられた大量の黒曜石製の石鏃がその嚆矢となったと思われます。そして大正時代に刊行された『諏訪史第一巻』には、諏訪を中心とした信州産黒曜石が広く分布することが記述されています。

戦後の1949年、群馬県岩宿遺跡で、縄文時代



鳥居龍蔵『諏訪史第一巻』より

をさらに遡る旧石器時代の文化が確認されました。1953年には諏訪市茶白山遺跡で大量の旧石器を発見、その後1950

～60年代にかけて黒曜石原産地遺跡の発掘が信州大学などにより行われ、黒曜石に関わる考古学の研究は、この信州を中心に進展していったと言っても過言ではありません。

黒曜石利用のはじまり

黒曜石は3万数千年前の旧石器時代から利用がはじまります。信州黒曜石物語もここからはじまります。旧石器人は露頭から転げ落ちた手ごろな原石を拾い、石器の材料としていたと思われます。大量の原石が野尻湖周辺日向林B遺跡や貫ノ木遺跡まで持ち運ばれ、遺跡内で原石から石器製作を行っていたようです。



持ち込まれた黒曜石原石 貫ノ木遺跡 (当館蔵)

2万年前になると原産地に拠点を設け、各地に石器や半製品を搬出していたことが長和町鷹山遺跡群や男女倉遺跡群など原産地内の遺跡から確認できるようになります。旧石器時代の前半期は原石採取の場であった原産地は、後半期には石器製作の拠点へと変化したようです。

中部高地の縄文文化を繁栄に導いた黒曜石

そして縄文時代になると星葉峠や星ヶ塔山に鉱山が出現し、地面を掘って黒曜石を獲得するようになりました。原産地から消費地までの道のりに、中継地のようなムラが見られるようになります。



国史跡星葉峠黒曜石原産地遺跡の黒曜石原石 (長和町教育委員会蔵)

縄文鉱山である長和町の星葉峠と下諏訪町星ヶ塔の二つの原産地遺跡、さらに茅野市冷山、佐久穂町麦草峠産出地から岡谷市・諏訪市・茅野市・原村・富士見町といった諏訪盆地の縄文集落への流通の実態を探り、黒曜石に支えられた縄文文化を考えます。八ヶ岳山麓の縄文遺跡と出土品は今年度、日本遺産に認定されました。構成遺産の出土品も展示します。

**北と南の黒曜石文化
—北海道と九州島の黒曜石文化—**

信州の黒曜石文化の特徴を描き出すためには他地域の黒曜石文化と比較して見る必要があります。旧石器時代終末期の長野県野辺山高原には矢出川遺跡群という細石刃石器群の拠点遺跡が形成され

ます。その頃の北海道幌加沢遺跡遠間地点の巨大な細石器（北海道指定文化財）、九州長崎県泉福寺洞穴の石器群（国指定重要文化財）とその文化の特徴を比較します。



幌加沢遺跡遠間地点の細石器資料 (遠軽町教育委員会蔵)

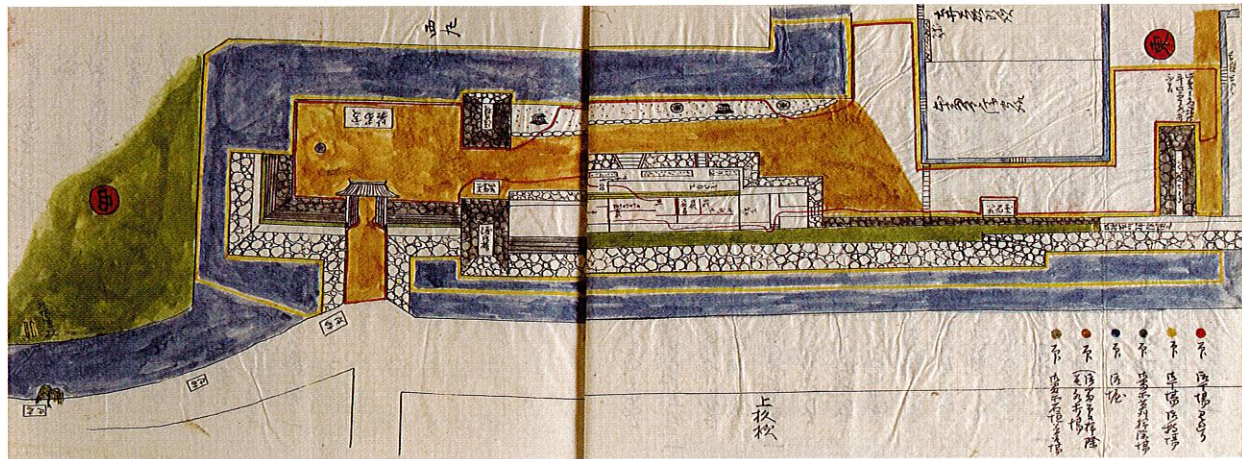
**信州黒曜石文化はすごい！
最古の信州ブランド黒曜石**

利器としての黒曜石は良質で、3万年の長きにわたりブランド品でした。精巧な技術を駆使し石器を製作した信州の旧石器・縄文人たちの社会・文化は、現代の「ものづくり」文化に受け継がれていると思われます。この機会に貴重な黒曜石を共有し広く流通させ、人びとの絆を大切にしたい旧石器・縄文人の生き方に触れてみてはいかがでしょうか。

イベントも盛りだくさん

9月22日(土)には浅間縄文ミュージアム館長の堤隆さんによる講演会が、また10月20日(土)・21日(日)にはイギリスから研究者をお招きし、講演や国際シンポジウム、国際交流子どもサミットを計画。さらに11月3日(土・祝)には葦木ヒロカさんによるコンサートとトークショーなどイベントも多数あります。(大竹憲昭)

文献史料をよむ 高島藩士が門番だった「外桜田門」の記録



桜田門平面図 (部分 当館蔵)

江戸城の内濠に設けられた「桜田門」というと皆さんは何を思い出しますか。

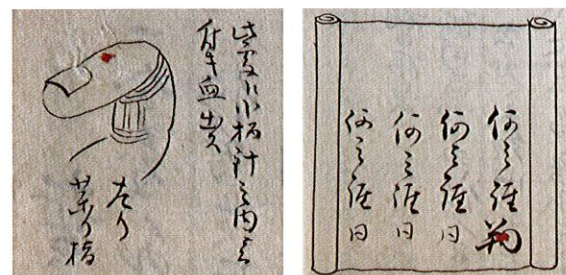
ここでいう桜田門とは外桜田門を指します。二の曲輪の御成口にあり、1860(安政7)年、水戸藩浪士らによる大老井伊直弼の暗殺事件や1932(昭和7)年の昭和天皇の馬車を狙った暗殺未遂事件が起こった歴史的にも有名な場所でもあります。そもそも、江戸城から小田原街道・東海道に至る江戸時代の小田原街道の起点でした。将軍が鎮座する入口で、現在も警視庁がその前に建っているように外桜田門は政治的にも重要な場所でした。

江戸時代、江戸城門の警備は番役として各大名に割り振られました。門により格式が異なり、最高格は大手門で、譜代10万石格とされました。なお外桜田門は将軍の御成門であることから譜代3~5万石の大名が担当しました。

さて当館が昨年購入した史料に「諏訪家家老用人心得」(請求番号0-21-1-1)という帳面があります。そこには高島藩が天保年間ごろ外桜田門の警備に当たった際の詳細な記録が残されています。

ここは将軍の通行する門なので、警備は藩士から選りすぐって配置されます。番役にあつたものは、書付の趣を堅く守るように起請文を提出したといいます。その起請文には、「左葉指シバリ、小柄針の内にて付き血を出し、紙にて忝度ふき又

シボリ出シ判形認め候」とあり、サインに血を含ませる血判起請文であることがわかります(下写真参照)。



諏訪家家老用人心得 (部分 当館蔵)

この書付には、徳川家康の廟のある紅葉山や将軍家の菩提を弔う増上寺や寛永寺への将軍や御臺所などの参拜日などが記されています。御成の門として極めて重要な日であったことがわかります。また御三家・御三卿・御嫡子の通行時の警備、オランダ人、朝鮮通信使、琉球使節の際の警備の詳細など、通行者によって当日の番の仕方が変わったことなどが記されています。番を勤めるものは毎朝、休息所行燈脇の「判形帳」と呼ばれる出勤簿に書判(サイン)を記していたこともわかります。

近代警察制度の創設者川路利良が警視庁を設置したのはこの門の正面でした。この門が近世以来の首都防衛の要にあつたからでしょう。以来「桜田門」といえば「警視庁」のことを指す隠語となっています。(村石正行)

考古資料をよむ 長野県宝下茂内遺跡の三つの槍先形尖頭器 一刃はこの部分にあり

1 はじめに

打製石器(石を打ち欠いて成形する)の刃は、磨製石器や刀剣類のように研ぐことによって刃をつけてはいないので、石を打ち欠いた時の鋭利な部分をそのまま利用するか、細かい剥離などから、刃の部分を作り出すかのどちらかになります。

ここでは、1988(昭和63)年から2年間、佐久市香坂で上信越自動車道建設にともなう長野県埋蔵文化財センターによって調査され、2006(平成18)年長野県宝に指定された下茂内遺跡(文献1)の槍先形尖頭器2点について、肉眼の範囲で刃の部分について分析調査を行いました。

2 二つの槍先形尖頭器



二つの槍先形尖頭器 (A:長さ12.4cm、B:長さ8.8cm) (当館蔵)

下茂内遺跡では、遺跡から北東に直線で約2.5kmにある、八風山から産出する、無班晶質安山岩という黒色で緻密な安山岩を用いて、大量の槍先形尖頭器を製作していました。出土した石や石片は約10万点、槍先形尖頭器は、製作時に折れたものも含め約300点が埋もれていました。黒曜石製の槍先形尖頭器は、1点も出土しませんでした。黒曜石原産地での槍先形尖頭器製作の時期より後で、黒曜石以外の石材に対応した槍先形尖頭器の製作跡と考えられています。(註)

3 連続する細かい剥離と刃

2点の槍先形尖頭器は、おびただしい数の石片が見つかった製作跡から南西へ約10mほど離れた場所で発掘されました。

全体の形状が整えられ、破損・欠損もない状態で計算された精巧な石器作りは“匠”を彷彿させ

ます。

この槍先形尖頭器の表面に残された、製作に関わる、縁辺部分からの打撃の痕跡(剥離)を観察し、次の4種類に分類しました。

- ①全体を薄くしていく剥離。
- ②全体の平面形を整える剥離。
- ③縁辺の叩く部分を少し厚くする剥離。
- ④刃をつける細かい剥離。



槍先形尖頭器A 刃の部分の拡大写真(左図 矢印部分) (当館蔵)

Aは、表面先端右で約4.5cm、裏面先端左右で約4cm、裏面左右中央から下端にかけて、約5~8cmの長さで、4mm以下の細かく連続した剥離が丁寧(ていねい)に施されています。③の剥離とは、剥離の長さや連続性の観点で見ると異なります。Bは、表面先端右約2cm、左約4cmと左右中央から下端にかけて約4~5cm、裏面先端右に約4.5cmで4mm以下の細かく連続した剥離が丁寧(ていねい)に施されています。

この細かく連続する剥離で刃を形成していると考えられ、その場所からは、先端で突き、横に切るという機能が刃にあると考えられます。この二つの槍先形尖頭器の精巧な作りと入念に施された刃からは、“一つの作品”ともいえる槍先形尖頭器の姿が浮き彫りとなり、動物と対峙する当時の人たちの覚悟がここに読み取れます。(近藤尚義)

(註) 大竹憲昭「先土器時代終末期における石材利用変化—細石器・神子柴系石器群を中心に—」『第20回長野県旧石器研究交流会シンポジウム 神子柴系石器群とはなにか?』p36-p37 2018年

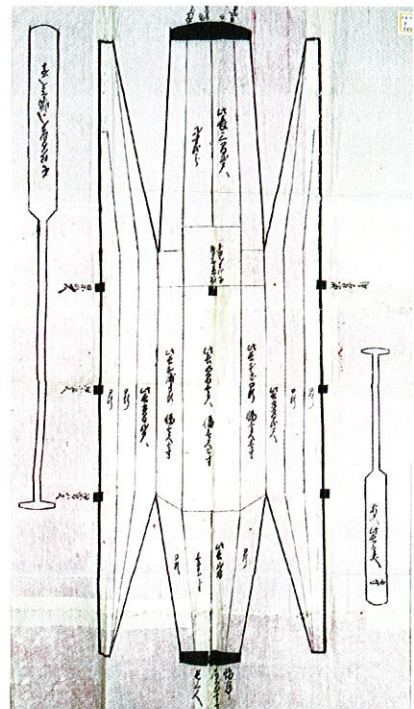
- (参考文献)
- 1 近藤尚義 小林秀行他 1992年『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2 下茂内遺跡』
 - 2 『第20回長野県旧石器研究交流会シンポジウム 神子柴系石器群とはなにか?』2018年

展示資料の紹介

千曲川通船の「形どり図面」と「川筋略絵図面」

長さ約19メートルの太左衛門船

川船で荷を運ぶ通船が千曲川で正式に実現したのは、1790（寛政2）年の太左衛門船です。西大滝村（飯山市）の斎藤太左衛門は、通船5艘、西大滝と福島（須坂市）の区間を許可されました。



船の大きさは、長さが10間4尺（19.3m）、幅が9尺～10尺（2.7～3.0m）、積載量が上り80俵（4.8t）、下り90俵（5.4t）でした。船の形は、図面（左の写真）を見ると、舳ととも（船尾）が反り上がっていたことがわかります。

太左衛門船形どり図面
（当館寄託 斎藤家文書）

乗員は船頭と舳乗を含め

た6人で、綱手4人は上りには綱を引いて船を引き上げました。

松代藩でも始めた川船

1816（文化13）年、松代藩でも領内（川田・福島間）で通船を始めました。船荷は、塩・米・茶・木綿・油・菜種・紙・肴などです。

船の大きさは太左衛門船と同じくらい（積載量は35駄＝5.25t）で、造船費用は13両でした。帆を用い、のちには松代・飯山間を下り1日、上り4日で運航しました。

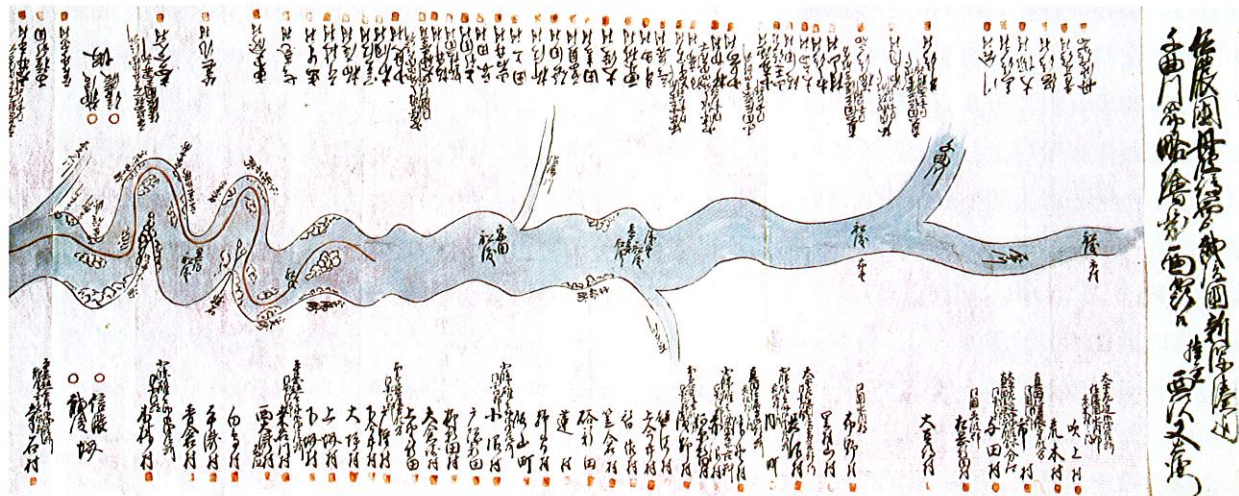
新潟湊までを目ざした厚連船

善光寺町後町の商人である小野厚連は、丹波島（長野市）から新潟湊（新潟市）までの新規通船を企てました。信越国境は急流が多く、船の難所です。多額の工事費がかかるため、川田宿問屋の西沢又右衛門らの力を借ります。工事では、急流で大筏を使ったり、鎖で船をつないだりして大櫓を組み、大岩をたたき割ったり、焼き砕いたりしました。

下の写真は1839（天保10）年に又右衛門が川浦役所へ提出した千曲川筋略絵図面です。長さが約218cmで、千曲川・犀川合流付近から新潟湊までの沿岸町村と岩場の状況を見て取れます。

厚連は、1841（天保12）年に丹波島～新潟湊間、80艘の通船運航を認められました。しかし、1847（弘化4）年の善光寺地震によって川筋が崩落して復旧できず、西大滝までの運航となりました。

（畔上不二男）



信濃国丹波嶋宿より越後国新潟湊迄千曲川筋略絵図面（部分 当館蔵）

研究の窓

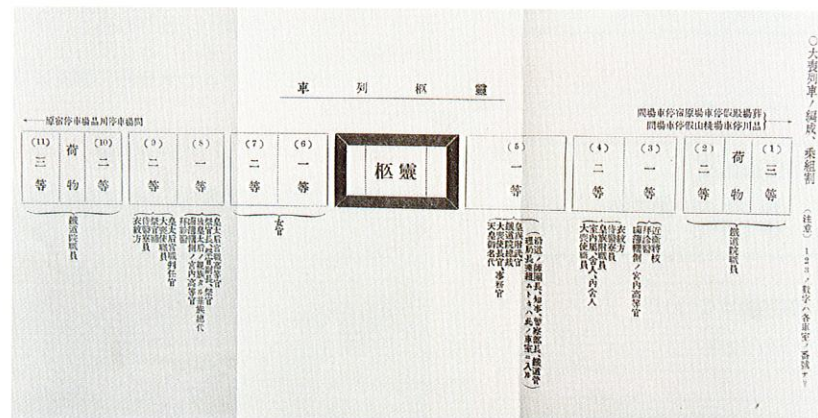
天皇の御大典と地方饗饌

来年は、2月24日に天皇陛下在位30年記念式典、4月30日に退位の礼、その翌日の5月1日には新天皇即位に伴い新元号へ改元されます。

「御大典（即位の礼や大嘗祭等一連の儀式）」は、新天皇の一代一度限りの皇位継承式典です。

当館には、戦前の皇室行事と長野県を結び付ける「長野県行政文書」〔2008（平成20）年1月、長野県宝指定〕等を収蔵しています。

「大喪儀参列諸員心得」（元長野県政資料室資料）は、明治天皇の崩御に伴い作成された冊子で、東京で執りおこなわれる大喪の儀に参列する県関係者に配られたものです。ここには、大喪の儀進行計画に、「青山御所并葬場殿付近通路別」や救護所の位置など興味深い図が添付されています。このうち「大喪列車ノ編成、乗組割」は、霊柩列車に乗車する皇族方と宮内庁職員専用車両を、鉄道院職員乗車車両が前後を挟む配列の様子がわかります（葬場殿仮停車場付近略図）。



葬場殿仮停車場付近略図（部分 当館蔵）

大正天皇の即位大礼に伴い県下で執りおこなわれた御大典は、大正4年の『御大典地方饗饌関係書類』（大4/8/1）等12種目の簿冊が、昭和天皇践祚による御大典は、昭和4年の『御大典地方饗饌関係書類（大礼記録資料二関スル件）』（昭4/A/6/2）等18種目の簿冊がそれに当たります。

昭和天皇の御大典は、今から90年前の1928（昭和3）年に実施されています。関連文書によれば、この年の10月4日に、「臨時議会ニ於テ賜饗場設備費予算金七千五百五拾参円満場一致決議セラル」とあり、急ぎ支出を決めたことがわかります。

御大典、饗饌の準備は、委員長（内務部長）以下、副委員長2名（警察部長・学務部長）・委員14名（視学官1名、事務官6名、賜饗場所在地市町長4名、技師1名、属2名）・係員146名（庶務係6名、設備接待係124名、衛生係11名、会計係5名）の163名が当たりました。

県下の賜饗場は、長野市が蔵春閣（市公会堂）と長野県師範学校、松本市が松本尋常高等小学校、上田市が公会堂、諏訪郡上諏訪町は高島尋常高等小学校が会場に選ばれています。

「賜饗有資格者及参入人員」は、総計で5,042人。その内訳は、蔵春閣787人分、長野県師範学校674人分、松本尋常高等小学校1,077人分、上田市公会堂1,118人分、そして高島尋常高等小学校997人分を数えました。外に陸軍饗饌場の389人分を加えています。

御大典、饗饌の恩恵に浴したのには、高等官、有爵者、勲等褒章授与者、県職関係者、市町村長と関係者、小学校長に、知事が選定した者で、場外においても賀意が表されています。

新元号へ改元される間近の平成の世にあって、今日の象徴天皇制を考える比較対照として近代天皇制があります。地方饗饌は、「国家は天皇を中心とした家族」という考え方を国民に強いた政策として、近代史に位置付ける必要があるのです。

（伊藤友久）